

2021 年度 2 学期始業式式辞

読書を通して思考を深めることの面白さ 芥川龍之介「六の宮の姫君」

2021 年 9 月 1 日

兵庫県立播磨南高等学校長 吉田尚美

今日から 2 学期が始まりました。今回は芥川龍之介の小説「六の宮の姫君」のお話をして、本を読んで深く考えることの面白さをみんなで体験したいと思います。

まず、本文を交えながらおおまかに物語の内容を話します。

六の宮の姫君の父は、古い宮腹《みやばら》の生れだつた。が、時勢にも遅れ勝ちな、昔気質《むかしかたぎ》の人だつたから、官も兵部大輔《ひやうぶのたいふ》より昇らなかつた。姫君はさう云ふ父母《ちちはは》と一しよに、六の宮のほとりにある、木高《こだか》い屋形《やかた》に住まつてゐた。六の宮の姫君と云ふのは、その土地の名前に拠《よ》つたのだつた。

父母は姫君を寵愛《ちようあい》した。しかしやはり昔風に、進んでは誰にもめあはせなかつた。誰か云ひ寄る人があればと、心待ちに待つばかりだつた。姫君も父母の教へ通り、つつましい朝夕を送つてゐた。それは悲しみも知らないと同時に、喜びも知らない生涯だつた。が、世間見ずの姫君は、格別不満も感じなかつた。「父母さへ達者でゐてくれれば好い。」——姫君はさう思つてゐた。

しかし、父母は亡くなり、六の宮の姫君は乳母と 2 人だけになってしまいます。生活はどんどん苦しくなります。けれども、どうすることもできず昔と少しも変らず、琴を引いたり歌を詠《よ》んだりして過ごしていました。

そんなある日、乳母が「丹波《たんば》の前司《ぜんじ》という殿が姫君に会はせほしいと言っています」と話しました。姫君は嫌だと思って泣くばかりでした。

しかし姫君は何時の間にか、夜毎に男と会ふやうになつた。男は乳母の言葉通りやさしい心の持ち主だつた。顔かたちもさすがにみやびてゐた。その上姫君の美しさに、何も彼《か》も忘れてゐる事は、殆《ほとんど》誰の目にも明らかだつた。姫君も勿論この男に、悪い心は持たなかつた。時には頼もしいと思ふ事もあつた。が、蝶鳥《てふとり》の几帳《きちやう》を立てた陰に、燈台の光を眩《まぶ》しがりながら、男と二人むつびあふ時にも、嬉しいとは一夜も思はなかつた。

こうして姫君の暮らしはよくなりましたが、ある日男は父親とともに陸奥の国に行つてしまいます。5 年たてば戻ってくると言いましたが 6 年目の春が来ても男は戻ってきませんでした。

姫君の生活は再び貧しくなり、館は大風に倒れ、持ち物は全て売って米や野菜に変え、姫君の着物や袴も身につけているもの以外は残っていませんでした。それでも姫君は琴や歌に気を晴らしながら、じっと男を待ち続けました。

乳母は新しい男を紹介しますが姫君は「唯静かに老い朽ちたい。」と言ひその他は何も考えませんでした。

男が、常陸の国で娶った妻と、京都に帰ってきたのは 9 年目の秋でした。六の宮へ行つて見ると、門も屋敷もことごとく崩れ果てていました。男は翌日から姫君を探しまわります。何日か後の夕暮れ、男は雨を避けるために朱雀門の前にある西の曲殿の軒下に立っていました。男の他にはお坊さんが一人、雨がやむのを待っています。窓の中に人の気配を感じた男は、ふと薄暗い格子の中をのぞいて見ました。そこに

は女が一人、破れた筵（むしろ）をまといながら、病人らしき女を介抱していました。男は一目見て、その女が六の宮の姫君であるとわかりました。男が今にも死んでしまいそうな姫君のもとに走り寄ると、乳母は雨宿りをしていたお坊さんに姫君のためにお経を読んでくださ いれと頼みました。

お坊さんは姫君に、「自分で阿弥陀仏の名を唱えなさい。」と言いましたが、姫君は「何も、一何も見えませぬ。暗い中に風ばかり、一冷たい風ばかり吹いて参ります。」と言って死んでしまいました。それから朱雀門のあたりには、女の泣き声がするといううわさが広まりました。姫君を看取ったお坊さんは「あれは、極楽も地獄もしらぬ、不甲斐ない女の魂でござる。」と言いました。

この話をみなさんはどう思いますか？六の宮の姫君は、どうして極楽に行けなかったのでしょうか。六の宮の姫君は何にも悪いことをしていません。平安時代の姫君としての生活を送り、たまたま不幸な出来事が続いてしまった。悪いのは、帰ってこなかった男なのに死んでからも、極楽に行けないなんて可哀想すぎると思いますか。

六の宮の姫君が極楽に行けなかったのは、自分から何かをしたいと望んだり、行動を起こしたりすることがなかったからです。いいことも、悪いこともしなかった。いつも回りに流されて、自分の人生を生きていなかった。だから極楽へも地獄へも行かず、中途半端にさまようことになったのです。

いやいや、そうはいっても姫君が何も行動しなかったのは平安時代の社会通念や育て方のせいで、しかも親が亡くなったり、男が遠くに行くことになったりしたことが原因であって、姫君のせいじゃないと思った人はいいますか？その考え方は心理学で言うと、すべて過去の出来事が悪いというフロイトの原因論の考え方です。

しかし、よく考えてみてください、姫君と同じ境遇に置かれた人は、みんな同じ道をたどるでしょうか。姫君は、乳母が紹介した新しい男を夫にしたり、遠くに行った男に手紙を書いたり、使いをやったり、親戚を頼って宮仕えをしたりできたかもしれません。でも、しなかった。それは姫君自身が『変わらない』という決心をし、不幸になることを無意識のうちに選んでいるとも言えます。新しい環境や人間関係で、心を痛めたり苦勞したりするよりも、変わらない生活をするほうが、姫君にとって都合がよかった、楽だったということです。しかも、自らの不幸を武器に、乳母を心配させ、束縛しようとしています。姫君は不幸になることを選んでいる、不幸を目的にしていることになります。

これは、アドラーの心理学でいうところの目的論の考え方です。過去が原因で不幸になったと考える、原因論に立つ限り過去は変えられないから、人が変わるのは難しい。不幸なのはしかたないということになります。けれども、アドラーの目的論に立てば、過去は関係なくなり、人生を選びなおすことができます。姫君が過去は関係ないと考え、未来の幸せを目的にすることができれば、人生を変えることができたということです。芥川龍之介の「六の宮の姫君」というお話は、実は深層心理や人生の選び方まで考えさせる奥の深いお話なのです。本を読んで考えることは、なかなか面白いと思いませんか。

そして、みなさんにはもし不幸なことがあったとしても、『トラウマや過去は関係ない。今の自分を変えようと努力すれば、未来はいくらでも変えられる。』という目的論に立った考え方をして、自ら行動を起こしてほしいと思います。学校生活を面白くするのは、みなさんの行動にかかっています。2学期から新しい気持ちで、皆さんが自らの未来を切り開く行動を始めることを期待しています。